

教育学研究科・グローバル教育展開オフィス

木野 涼介

国際学会：Yale Symposium 2026

参加地・期間：Yale University（アメリカ・ニューヘイブン）2026年8月27日～30日

発表題目：The Image of Ancient Empresses and Female Officials in the “History of Nursing”

成果の概要

1. 報告者の発表内容の概要および直接的な応答

報告者はThe Image of Ancient Empresses and Female Officials in the “History of Nursing”（「看護の歴史」における古代皇后・女官像）との標題にて、近代日本における「看護史」の形成過程を、特に古代「看護史」への女性皇族・女官の包摂を通じて検討した。本発表はSession 4: The Institutionalization of the Emperor System and Gender（構造化する天皇制とジェンダー）の一部を構成し、近代日本における近代天皇制の定着過程を「看護史」という視座から析出するとの役割を担うものであった。

本発表に対してフロアより、一夫一婦制はキリスト教精神に基づくものであり、近代化過程において日本へ移入された制度であるところ、近代日本における受容過程ではキリスト教の要素が捨象され、日本古代の事象と接続する言説が形成されるとの現象が生じた。「看護史」に係る事象は、上述の日本におけるキリスト教に依拠する文化受容の態様の一環として把握しうる可能性が指摘された。また、看護史におけるキリスト教の影響力を指摘した上で、発表対象とした時期以降の「看護史」の展開を問う質問がなされた。

加えて、セッションの全体討論においては天皇の男系継承の前提としての天皇の男装化という指摘がなされた。この点、日本赤十字社のような「慈善」事業は、女性皇族の慈恵の客体として存在していた一方で、戦前期日赤の総裁は男性皇族であり、戦後「名誉総裁」への転換に伴って皇后による名誉総裁就任が慣例化してゆく。よって、戦後における神聖天皇崇敬システムの変容と連続性、日赤看護看護婦に要求されたジェンダー規範の多重性といった論点についても深化させる余地があると認識した。

2. 会議全体より得た成果（他の研究者との交流・会場の様子を含む）

(1) 発表

報告者が聴講したセッションの内容は多岐にわたるが、例えばBrian Rogers氏のTitle: “Overcoming Rush Hour”: Commuter Fatigue and the Politics of High Economic Growth in Postwar Japanにおいては、労働科学による通勤疲労の析出とその個人化の過程が明らかにされるとともに、背景としての少ない交通インフラへの公費投入が指摘されており興味深いものであった。加えて、当該背景の基礎となった日本社会のより深部の構造を把握するとともに、自身の研究を当該構造へ位置づける必要をも感じた。

(2) その他の成果

また、学会の附属プログラムの一環として、開催地であるイエール大学所蔵の同大学への日本人留学生関連史料を閲覧し、また当該史料を管理するアーキビストの方との関係を形成することができた。看護学史においては、金子光（1914-2005）がイエール大学留学生であることは著名な事実であるが、その余の看護職たるイエール留学生につき、原史料に接したことは、今後の研究活動の進展に寄与するものである。

加えて、日本赤十字社を対象とする研究者とのコネクションを形成し、日赤研究に係る情報交換を行った。報告者は、現在アメリカにおいて日赤という対象への関心が高まっているとの情報を得るとともに、報告者から日赤の史料状況について情報提供を行った。

3. 今後の研究活動へのつながり（会場の様子を含む）

今般の学会参加により、アメリカにおける日本研究の一端に接することができた。今回の経験を端緒に、アメリカにおける研究動向をも意識し、英文誌への投稿や再度の学会参加等へ展開したく思う。一方で、参加者においては複数言語を高い水準で読解する者が多数存在しており、自身の言語能力の不十分さを痛感したところである。

最後に、日本における人文科学研究に対する研究費の配分が必ずしも潤沢でない中、グローバル教育展開オフィスによる本制度に基づく支援なくしては、今般の学会参加は実現しなかったことと考える。オフィスの支援に深く感謝したい。